

急激な内傷により発症した 急性腰痛2例の鍼灸治療

吉岡広記 山田恵美
日本鍼灸研究会 吉岡鍼灸院

前言

▶ 山田報告症例男性（症例A）の

急激な内傷による急性腰痛2例を通じ

発症の経緯や病の推移などの所見から

内外傷の弁別の必要性を考察する

対象

- ▶ 年齢 : 35歳
- ▶ 性別 : 男性
- ▶ 仕事 : 自営業
- ▶ 特徴 : どこかひ弱で感情が顔に出やすい
- ▶ 肥瘦 : 瘦身
- ▶ 治療頻度 : 1週間に4~6回
- ▶ 脈證 人迎氣口診 : 虚燥痰燥の順 $\underline{K} > \overline{J}$ 数
(氣口浮滑 > 人迎沈滑)
- ▶ 六部定位診 : 肺経虚證

症例 B 発症日時：X年7月下旬、午前

▶ 発症の経緯

- ・ 前日は、徹夜の後、会議に臨む（終日）
- ・ その夜は、目がさえて未明まで寝られず
- ・ 当日は、起床後しばらくして急に発症
- ・ 同年4月（症例 A）以降に腰痛はなく、脈證は日常の虚燥痰燥で推移

不眠不休での久坐と知的作業（=内傷）が本腰痛の原因と見られる

▶ 所見

- ・腰部の劇烈な鋭い痛みが出る
(後屈 \leq 前屈 左 \geq 右)
- ・不用意に動くと起立不能に陥りそう
- ・久坐により一時的に悪化
- ・手足温
- ・大小便有り
- ・人迎気口診：気虚寒湿のやや逆 $\tilde{K} > \text{丁}$ 遅
(気口沈濇 $>$ 人迎沈滑)
- ・六部定位診：肺経虚證

▶ 治法

経緯と脈證より内傷と判断

本治法

肺経と大腸経の兪穴と経穴の補法

標治法（症例 A に同じ）

背面部の散鍼

證に基づく兪募穴への知熱灸

結果

$\tilde{K} > \bar{J}$ 遅



$\tilde{K} > \bar{J}$ 数

(気口沈瀆 > 人迎沈滑 数)

- ▶ 気燥痰燥の順となる
- ▶ 毎日治療するも脈證は気燥痰燥のまま推移
- ▶ 痛みに顕著な変化は見られず
- ▶ 4日目の治療後に日頃の虚燥痰燥に戻り、翌朝に消失した

考察 1 発症後の脈状変化が病状変化を示す

- ▶ 日頃の陰虚（気口浮）→陽虚（気口沈）
 - ・ 症例 A とは似て非なる状態
 - ・ 内傷により逆證に転化したことが発症の転機

	症例 B	症例 A
経緯（原因）	不眠不休での久坐 知的作業	体を冷やす
主證	内傷（内気の損傷）	外傷（形気の損耗）
治療後、陰虚に復するまでの期間	4日目	初回
陰虚に復して後の痛みの消失期間	翌日	8日目

考察 2 陽虚の程度が痛みの回復を左右する

▶ 症例 C

同年8月に本例と同様の状況下で同症状を発症

	症例 B	症例 C
人迎気口診	気虚寒湿のやや逆	気虚寒湿の順
陽虚（気虚）の程度	気口濇 = 逆 = 重	気口滑 = 順 = 軽
治法（本治法）	肺経・大腸経の俞・経	肺経・胆経の俞・経
陰虚に復するまでの期間	4日目	初回
陰虚に復して後の痛みの消失期間	翌日	翌日

考察 3

- ▶ 夜間痛がなく、大小便や手足の寒熱に変調が見られない理由
 - ① 風や寒による外傷ではないこと
 - ② 長期ではなく、急激な内傷であったこと

結語

- ▶ 症状が同じであっても
同一の患者であっても
発症の経緯、病の推移、肥瘦、脈状な
どの所見から、**内外傷**に分けて対応し
ていく必要性が示唆された
- ▶ **順逆***は、治法決定や予後判断を左右す
る病状（病の軽重）をはかるうえで重
要な指標となることが認められた

*肥瘦と脈状、症状と脈状の一致不一致など